

日系修道女と宗教的共同体の変容

ブラジル日系社会で活動したA修道会を事例に

佐藤悦子(東北大学大学院 教育学研究科 博士後期課程)

本発表では、ブラジル・サンパウロ市郊外にあるA修道会の修道女たちに焦点を当て、ブラジル日系社会での布教活動に尽力し、その役割を終えつつある修道女たちが、いかにして移民先で新たなライフスタイルを歩もうとしているのかを明らかにする。

ブラジル日系社会でのカトリックの布教は1930年代から本格的に始まった。このような日本移民への布教は、ブラジルの司祭だけではなく、一部の日本移民によるところが大きかった。

サンパウロ市郊外にあるA修道会は、1938年に「日本移民の福音化」を目的として創設された。創設当初は、日本においては迫害の対象だった旧キリシタンである女性やブラジルでカトリックに入信した日本人女性が日系社会での布教活動に尽力し、現在では、2世や3世の日系人女性や宣教師として渡伯した日本人女性が、A修道会の中心的役割を担っている。また、日系社会での布教活動は縮小傾向にあり、日系社会における彼女たちの役割を終えつつある。そのため、A修道会の修道女たちは「日本人のために」と限定するのではなく、今は「ブラジル人のために」働くのだと語る。しかし、「日本人のために」働いていた時代は、布教活動という明確な目的があったが、「ブラジル人のために」働く現在は、かつてのように明確な目的はないといえる。

一方で、現在の修道女としての営みに注目すると、日系社会でその役割を果たした今だからこそ、高齢となる移民1世が宗教的共同体の中で共同生活を行い、自立する姿が浮かび上がる。A修道会の修道女たちは、一見すると「修道女」には見えない。おそらく、彼女たちの正体を知らない人であれば、大きな教会のミサに参列する彼女たちを他の一般信徒と見分けることはできないであろう。また、顧問を務めるS婦人会でも、多くの日系の婦人たちの中では誰が修道女なのかわからないだろう。このように可視化されない修道女たちは、ブラジル社会においてさまざまな工夫をしながら、自立しようと試みている。

例えば、A修道会では、黙想会を開く一般信徒のために食事と宿を提供する「黙想の家」を運営している。中心的な役割を果たすのは3世の修道女であるが、高齢の1世や2世の修道女も食事の提供などで重要な役割を果たす。「黙想の家」では、修道女たちの食事とは別に用意し、ブラジル人の嗜好に合わせた肉料理中心の料理を提供する。また、食事の全てをまかなうことはできないが野菜を作り、福神漬けやタケノコの水煮などの加工食品や酒などを製造している。酒は、黙想の家の利用者であるブラジル人(利用者の多くは非日系人)に試飲してもらい、その味を調節し、販売する。

また、修道女たちは高齢となった今でも、信仰として一丸となるために、黙想を行っている。この黙想によって、明確な目的を持たなくなった今、単なる共同生活ではなく、信仰生活として自らの日常を捉えている。A修道会の修道女たちは、これまで宗教的なことをあまり学んでこなかったという。というのは、自分たちが宗教的な知識を勉強することよりも、日系社会の布教活動のほうが優先され、修練期のときから「伝道婦」として働いていた。そこで、現在の指導司祭は「A修道会が属するフランシスコ会の精神を正しく理解するために黙想会で文献を読んでいる」という。月に一度行われる修道女の黙想会では1世は日本語クラスで2世3世はポルトガル語クラスで指導司祭から講和を受ける。

このように、これまでは日系社会で「伝道婦」として活躍した修道女たちが、現在は移民先であるブラジル社会において、さまざまな工夫をしながら、「修道女」である自分たちの生きる糧を模索している。本発表では、日系社会でその役割を終えつつある宗教的共同体と移民たちの変容を描きだしたい。

【移民、日系社会、ブラジル、カトリック教、修道女】